

警 弥 郷 B 遺 跡 3

— 第5次調査報告 —

2 0 0 7

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んでその結果数多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査をおこなって記録保存という形で、往事の有様を後世に伝えています。

本書は平成17年におこないました、警弥郷B遺跡第5次調査の内容について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとするご協力をいただきました、武末陽子氏をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

— 例 言 —

- ・本書は福岡市教育委員会が2005年6月1日から2005年8月26日にかけておこなった警弥郷B遺跡5次調査（南区弥永5丁目18-2～5）の報告である。調査は蔵富士寛が担当した。
- ・本書の編集は蔵富士がおこなった。なお、石器に関しては山口譲治，米倉秀紀のご指導，助言を受け，遺物の実測については米倉法子，山口朱美（石器）の手を煩わせた。
- ・本書における方位は磁北であり，遺構については，土坑（SK），溝（SD），ピット（SP）といった略号を使用している。
- ・本書に関わる資料は，この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目 次

I	はじめに	1
	1. 調査に至る経緯	1
	2. 調査の組織	1
II	警弥郷B遺跡について	2
III	調査の記録	4
	1. 調査の状況	4
	2. 遺構・遺物	4
IV	まとめ	

挿 図 目 次

図1	周辺遺跡 (1/25.000)	2
図2	警弥郷B遺跡 (1/5.000)	3
図3	調査地点 (1/800)	4
図4	遺構配置 (1/250)	5
図5	SC出土遺物 (1/3)	6
図6	SCO3~05 (1/40)	7
図7	ST配置 (1/80)	8
図8	ST (1/20)	9
図9	ST06・07・08 (1/6)	10
図10	ST09・10 (1/6)	11
図11	SD (1/400,1/40)	12
図12	SDO1上層出土遺物 (1/3)	13
図13	SDO1下層出土遺物1 (1/3)	14
図14	SDO1下層出土遺物2 (1/3)	15
図15	SDO1下層出土遺物3 (1/3)	16
図16	SD11・13出土遺物 (1/3)	17
図17	SK12 (1/40,1/3)	18
図18	SK14 (1/40,1/3)	18
図19	出土石器 (1/1)	19

図 版 目 次

図版1	1 調査区北東側 (北東から)	2 調査区南東側 (北東から)
	3 調査区北西側 (北東から)	4 調査区南西側 (北東から)
図版2	1 SD01 (南から)	2 SD01 (南から)
	3 SD11 (南から)	4 SD13 (南から)
	5 SC03・04・05 (南東から)	6 SK12 (南から)
図版3	1 ST全景 (北から)	2 ST06 (南西から)
	3 ST07 (北東から)	4 ST08 (南西から)
	5 ST09 (南西から)	6 ST10 (南西から)
図版4	出土遺物	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成17年1月26日、武末忠昭氏、武末陽子氏より、南区弥永5丁目18-2～5における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。この地点は警弥郷B遺跡の範囲内であることから、埋蔵文化財課では試掘調査をおこない、現地表下1mで遺構の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という形での対応が採られることとなった。発掘調査の開始は平成17年6月1日。同年8月26日にすべての作業を終了した。調査に当たっては、武末陽子氏をはじめとする関係各位に多大な協力を賜った。期して感謝したい。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託 武末陽子

調査主体 福岡市教育委員会

平成17年度

調査総括 埋蔵文化財課 課長 山口譲治
調査2係長 池崎譲二
調査庶務 文化財整備課 管理係 鈴木由喜
調査担当 埋蔵文化財課 調査2係 藏富士寛
調査作業 阿部幸子 小池温子 幸田信乃 小路丸嘉人 寺園恵美子 中野裕子 永田律子
夏秋弘子 早川 浩 増田ゆかり 吉川暢子

平成18年度

総 括 埋蔵文化財第1課 課長 山口譲治
調査係長 山崎龍雄
庶 務 文化財管理課 鈴木由喜
整理担当 埋蔵文化財第1課 調査係 藏富士寛
整理作業 柴田加津子 萩本恵子 日名子節子

遺 跡 名	警弥郷B遺跡 3				
遺跡調査番号	0521	遺跡略号	KYB-5		
地 番	南区弥永5丁目18-2～5			分布地図番号	41-警弥郷
開 発 面 積	3,428,6㎡	調査対象面	932,26㎡	調 査 面 積	1,237,75㎡
調 査 期 間	2005.6.1～2005.8.26				

II 警弥郷B遺跡について

警弥郷B遺跡は福岡平野の南側にあり、那珂川中流域の東岸、標高18~20m程の沖積地上に存在する。遺跡は福岡市域のみならず、春日市域、那珂川町域へと広がりを持つ。警弥郷B遺跡の周辺は弥生時代を中心とする遺跡が数多く存在する(図1)。北東側に存在する弥永原遺跡は、弥生時代後期の環溝集落が確認されており、調査の契機ともなったガラス製勾玉の鋳型や小型紡製鏡が出土している。その弥永原遺跡に西隣に存在する「日佐原遺跡」では50基を超える箱式石棺墓、甕棺墓などが発見されており、その内の石蓋土坑墓からは長宜子孫内行花文鏡が出土している。須玖岡本遺跡など春日丘陵に展開する遺跡群については、もはや詳述する必要もないだろう。また、老司古墳、日拝塚古墳、貝徳寺古墳など、数多くの古墳が存在する点についても注目されて良い。

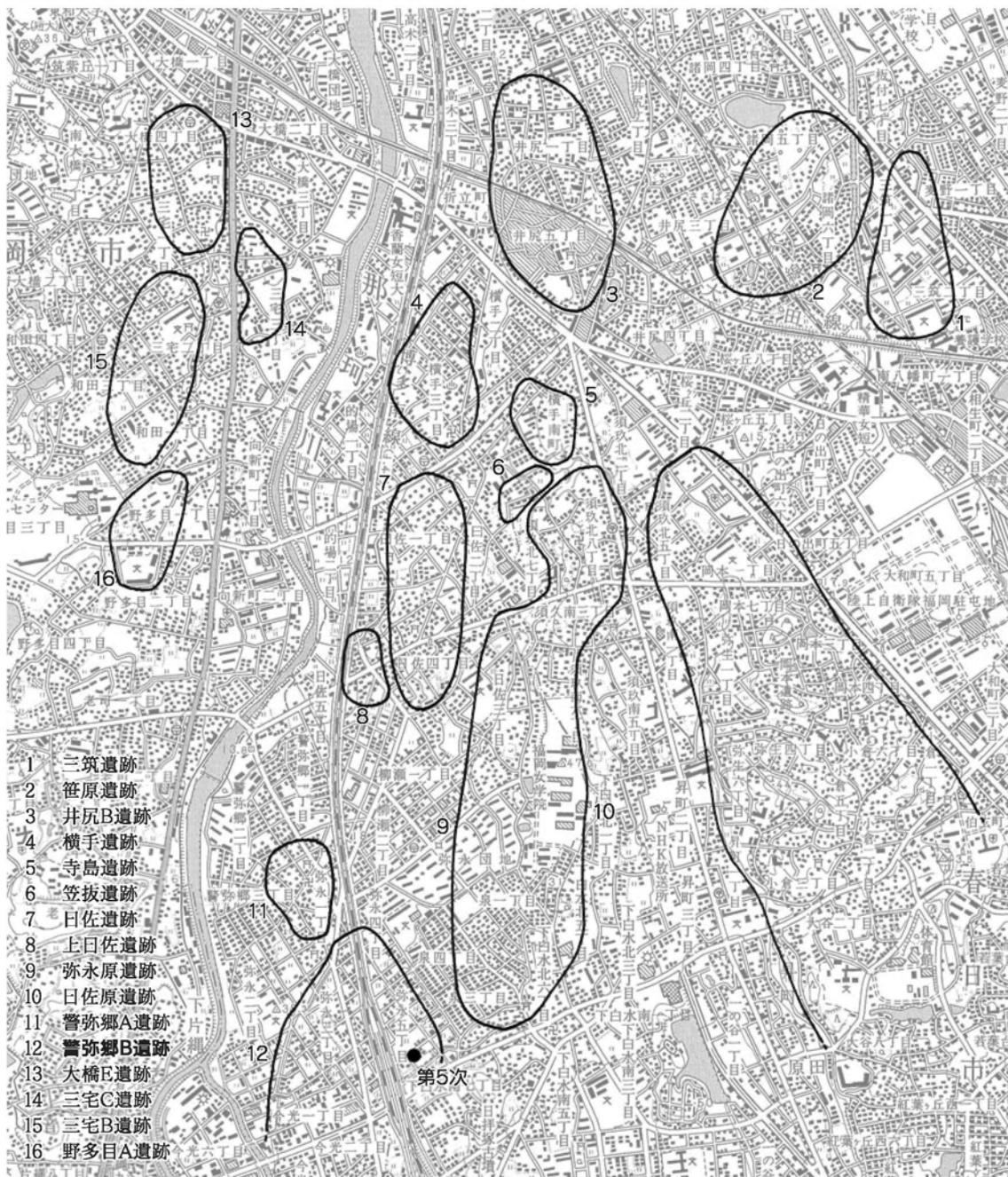


図1 周辺遺跡 (1/25,000)

警弥郷B遺跡ではこれまで4次にわたる調査がおこなわれてきた(図2)。以下に調査成果を概観したい。警弥郷B遺跡の発掘調査は、山陽新幹線建設に伴っておこなわれた「弥永遺跡」の調査をもってその嚆矢とする。「弥永遺跡」の調査では弥生時代前期～中期にかけての遺物が採集されているが(塩屋・折尾1975)、この調査時の弥永遺跡B・C地点が、後に警弥郷B遺跡として呼ばれることとなる。第2次調査は遺跡のほぼ中央部にておこなわれ、16世紀、弥生時代前期末の水田跡がそれぞれ確認されている(下村編1992)。第3次調査は遺跡北東端にて実施され、弥生時代後期～終末、古墳時代前期、古墳時代中期の各時期における竪穴住居や溝といった遺構がみついている(白井編1995)。第4次調査は遺跡西側においておこなわれ、11世紀末～12世紀後半の掘立柱建物、土坑、溝などが検出されている。また、包含層中からは縄文時代晩期の遺物が出土している(阿部2001)。今次調査地点は遺跡の東側に相当する。西側においては、第1・2次調査地点が存在する。

文献

- 阿部泰之2001「警弥郷B遺跡群第4次調査」上角智希編『中南部(6)―松原遺跡群第5次調査、日佐遺跡群第2次調査、警弥郷B遺跡群第4次調査報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書 第679集
- 塩屋勝利・折尾 学1975「弥永遺跡」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』
- 下村 智編1992『警弥郷B遺跡―第2次調査の報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書 第278集
- 白井克也編1995『警弥郷B遺跡2―第3次調査の報告―福岡市埋蔵文化財調査報告書 第414集

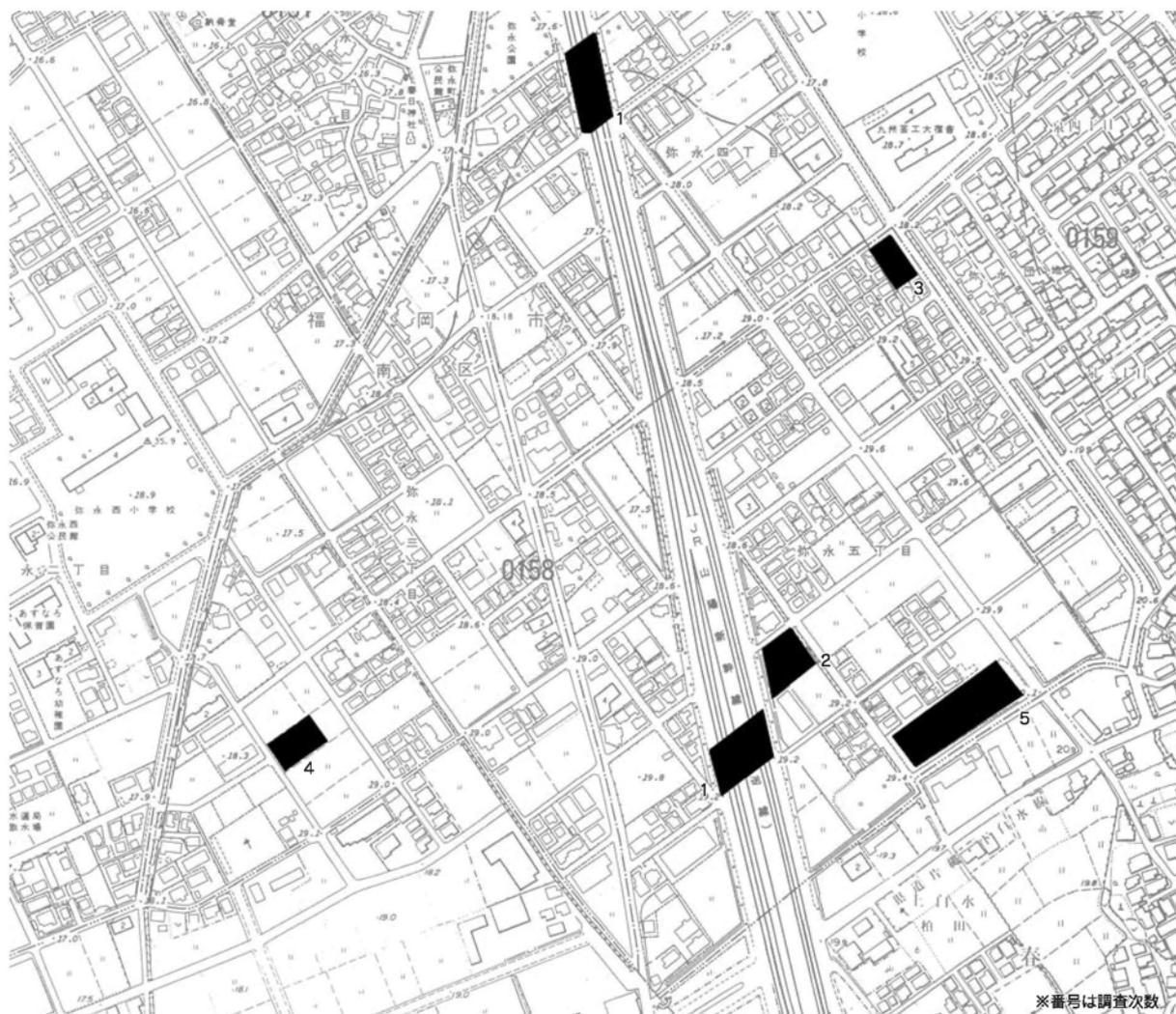


図2 警弥郷B遺跡 (1/5,000)

Ⅲ 調査の記録

1. 調査の状況

今次調査では厚さ1m程の客土下に存在する暗褐色～黄褐色砂質土上を遺構面として設定し、調査をおこなった。遺構面の標高は18.5m前後である。沖積地ならではの遺構確認の難しさに加えて、多くの風倒木痕の存在から、十分な遺構把握に至らなかった部分もある。排土処理の関係上、調査区を東西の二つに分け調査をおこなった。出土遺物はコンテナ20箱に過ぎず、遺構の密度も決して濃いものではないが、以下に述べるように、多くの成果を挙げることができた。

検出した遺構には、竪穴住居 (SC)、溝 (SD)、甕棺墓 (ST)、土坑 (SK) がある。以下にその内容について、述べていくことにしたい。尚、調査区東端において検出した溝 (SD013) については、一部トレンチ調査をおこない、その伸長方向についての確認をおこなった。

2. 遺構・遺物

ここでは遺構の種類ごとにその内容、出土遺物について述べることにする。

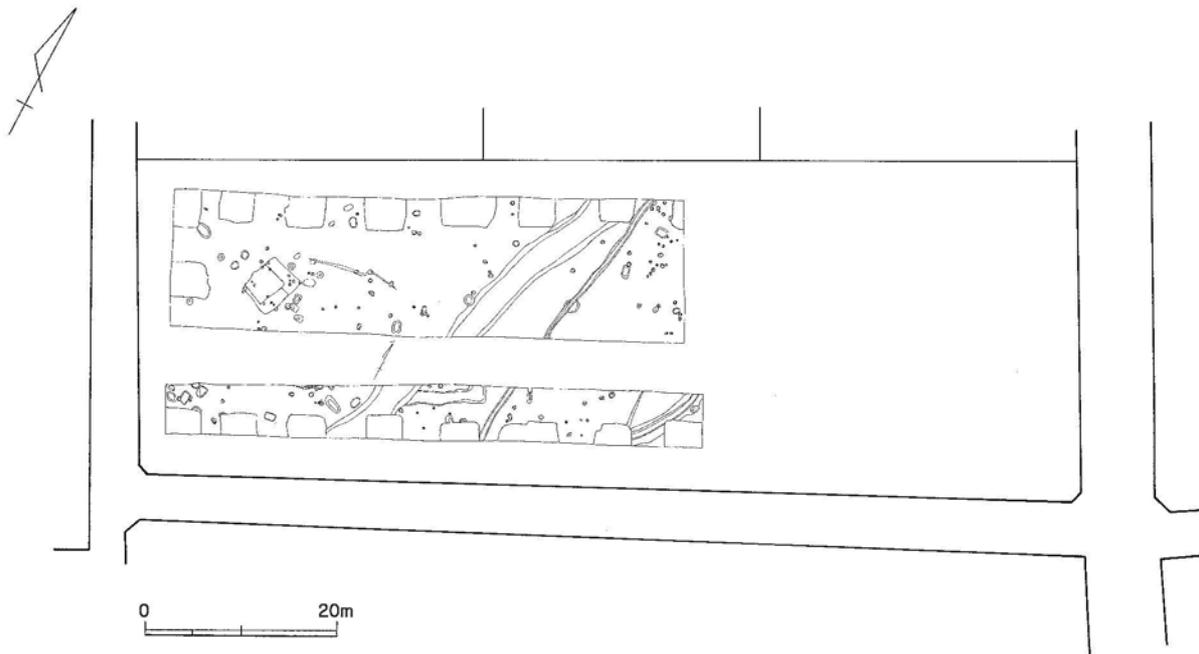


図3 調査地点 (1/800)

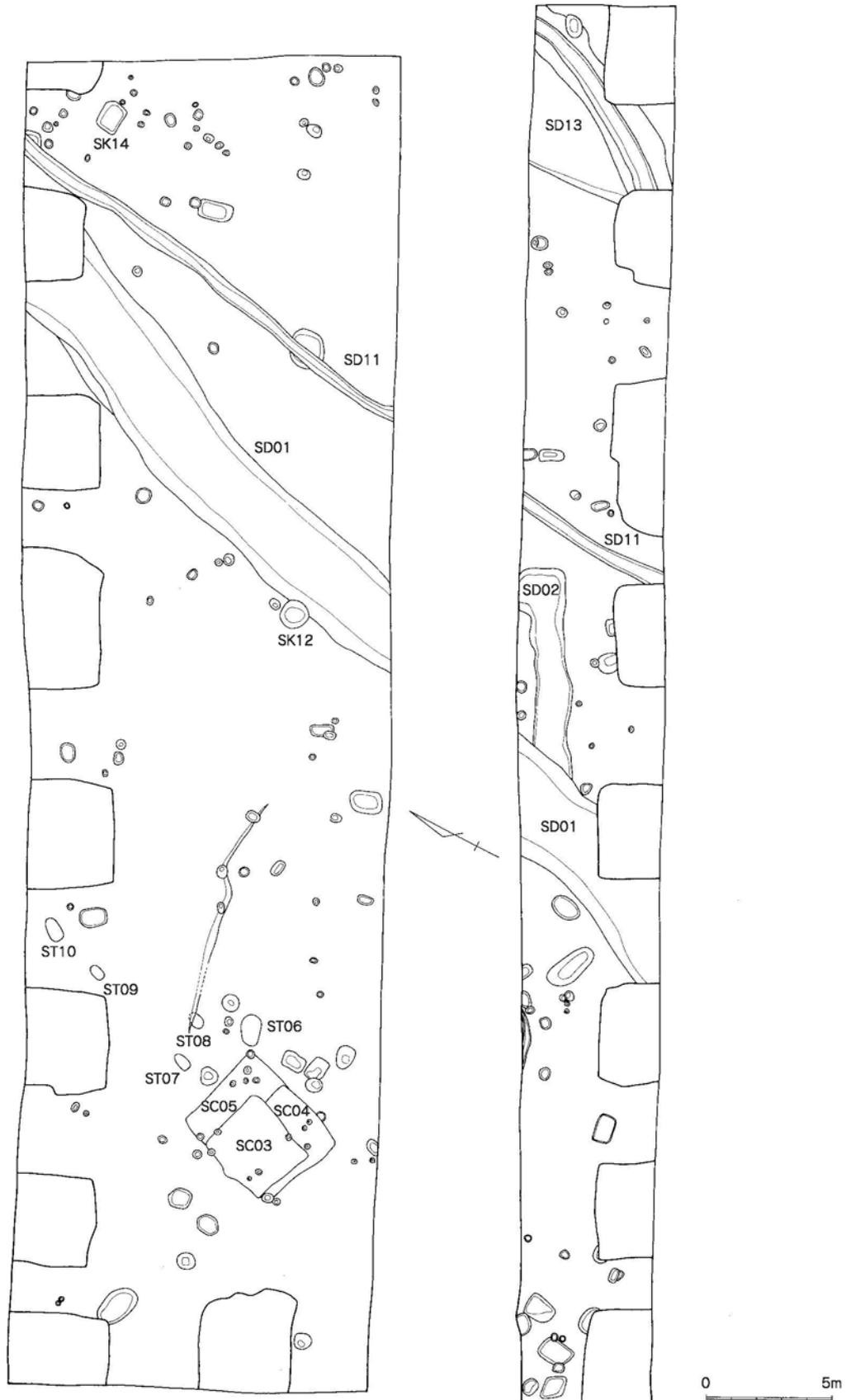


図4 遺構配置 (1/250)

1) 竪穴住居 (ST) (図5・6)

調査区西側に存在する。3軒の住居の切り合いと判断し、新しいものからSC03, 04, 05としている。遺構の遺存状況は悪く、各住居の深さは10cmにも満たない。調査の最終時に床面の切り下げを数度おこなったが、各住居における主柱穴の配置は最後までわからなかった。出土遺物も少ないが、SC04・05では床面上に土器がまとまって出土している。

今次調査区内において確認した住居はこの3軒のみで、遺構面上においても、土器の集中、焼土の存在等、他の住居の存在を推定させる痕跡も確認していない。しかしこの住居の遺存状況からみて、当調査地点は相当の削平を受けていることが予想され、以上の所見は、他の住居の存在を完全に否定するものではない。

SC05

住居の南側をSC03・04に切り込まれており、北側の一部が認められるのみ。住居の北辺は4m程を測り、周囲には壁溝が巡る。住居東辺では壁溝が二重に巡っており、他住居の存在、もしくは建て替え等がおこなわれた可能性も考える必要があるだろう。出土遺物は少なく細片の為、図示はしていないが、SC04と大差ない時期を想定できるのではないかと。

SC04

住居の西側をSC03に切り込まれている。3.7×3.2mの長方形プランを呈し、住居の南東隅部周辺に一部壁溝が認められる。住居床面直上から土器が検出でき、これら土器からこの住居は古墳時代前期に位置づけることができる。

出土遺物 (図5-4・5)

4は布留式系甕口縁部片である。肩部には波状の沈線を1条巡らしている。5は高杯脚部片。短脚で裾付近は屈曲する。円形の透かし孔を有する。

SC03

最最後出する住居。北西隅部の形態を確認することはできなかったが、3.3×2.7mの長方形プランを呈するものとみて良いだろう。住居北側の各辺に壁溝を巡らしている。この住居においても床面直上において、いくつか土器を検出することができた。それによればこの住居は古墳時代中期前半に位置づけることができるだろう。尚、住居南西隅部では床面上に焼土の広がりが確認できた(アミ部分)。他にその存在を確定づけるものは検出していないが、この部分にカマドが存在していた可能性が高い。

出土遺物 (図5-1~3)

1・2は甕口縁部片である。1は外反気味に、2は直線的に口縁部がのびている。3は高杯の杯部片。

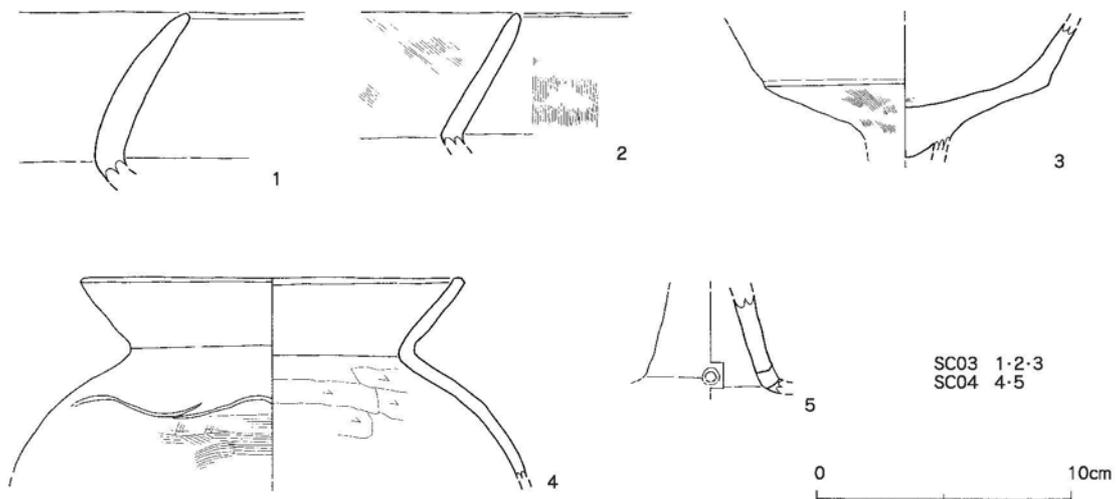


図5 SC出土遺物 (1/3)

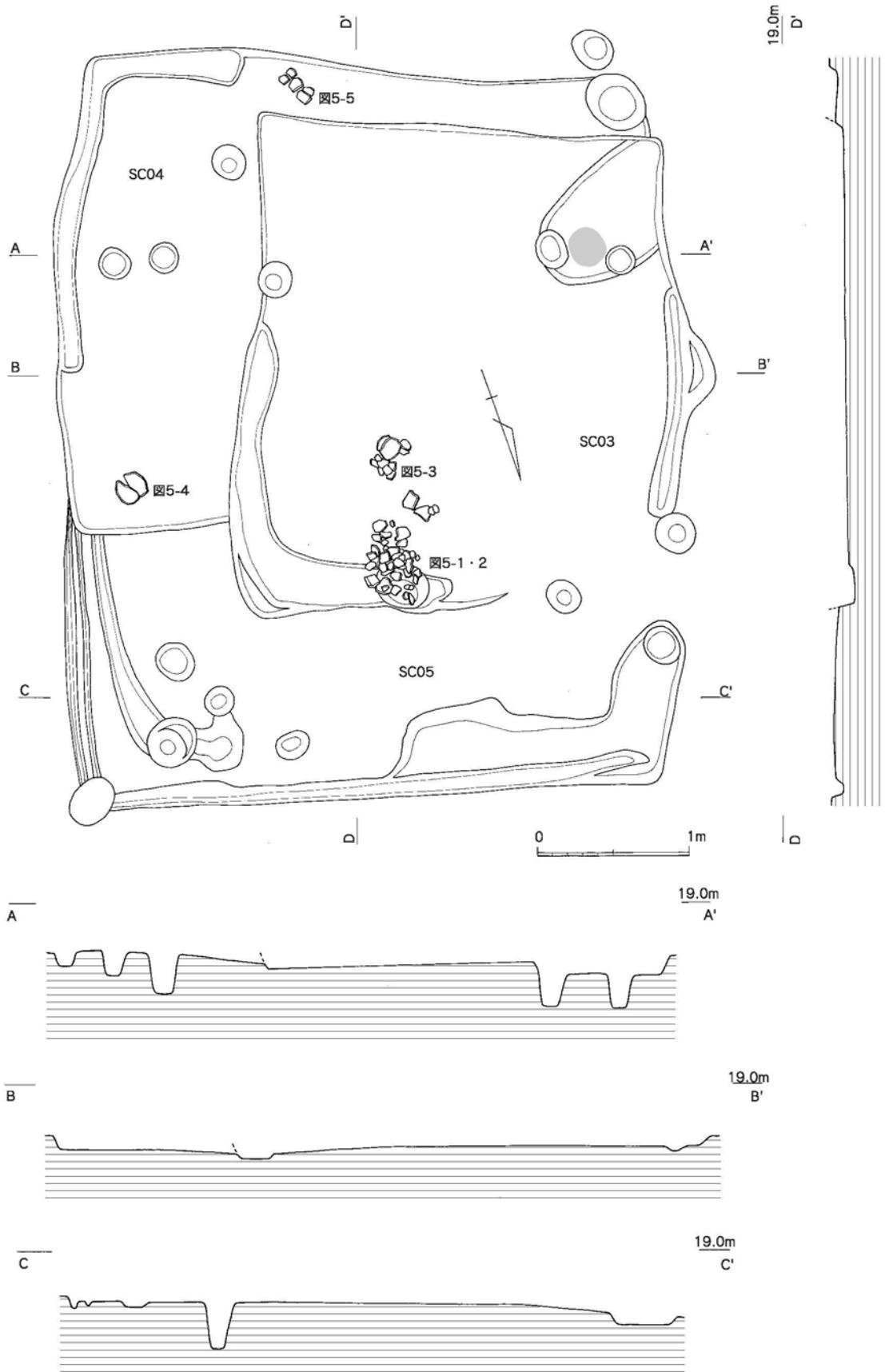


图6 SC03~05 (1/40)

2) 甕棺墓 (ST) (図8~10)

調査区の西側、SCO 3~05の北側に甕棺墓を5基検出した。いずれの棺も小形である。大きくは墓坑の軸線を南北方向にとるもの (ST07~10) と東西方向にとるもの (ST06) の2者があり、ST07・09・10は直線的な配列をみせている。いずれも削平を受けており、甕棺の遺存は1/2もしくはそれ以下である。いずれの甕棺も橋口達也氏による甕棺編年 (橋口1979) KIIc式併行期、弥生時代中期前半に位置づけることができる。尚、調査終了後、確認のため重機により1m近い遺構面の切り下げをおこなったが、他の甕棺墓を検出することはできなかった。調査区内の甕棺墓はこれがすべてである。

文献

橋口達也1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI 福岡県教育委員会

ST06 (図8)

主軸を (S— 63° —W) にとる。削平により甕棺の底部分が残るのみである。墓坑は現状では1.3×0.7mの楕円形を呈しており、深さは0.3m程。甕棺の埋置はほぼ水平である。

甕棺 (図9-1)

上甕、下甕とも甕を用いる。上、下いずれの甕も断面逆L字形の口縁部を有し、口縁下部には断面三角形の弱い突帯を一条巡らしている。下甕の底部は上げ底を呈する。上、下甕とも外器面にはハケ目調整を施す。

ST07 (図8)

主軸を (N— 20° —E) にとる。削平により甕棺の底面がわずかに残るのみである。遺存状況は悪く、墓坑の形態は不明。

甕棺 (図9-2)

上甕には鉢、下甕には甕を用いる。上下いずれの甕も断面逆L字形の口縁部を有し、口縁下部には断面三角形の弱い突帯を一条巡らしている。下甕の外器面にはハケ目調整が認められる。

ST08 (図8)

主軸を (N— 25° —E) にとる。攪乱により墓坑北側を切り取られている。削平により甕棺の底面がわずかに残るのみであり、上甕はほとんど残っておらず、復元すらできなかった。墓坑はほとんど残っておらず、形態は不明である。

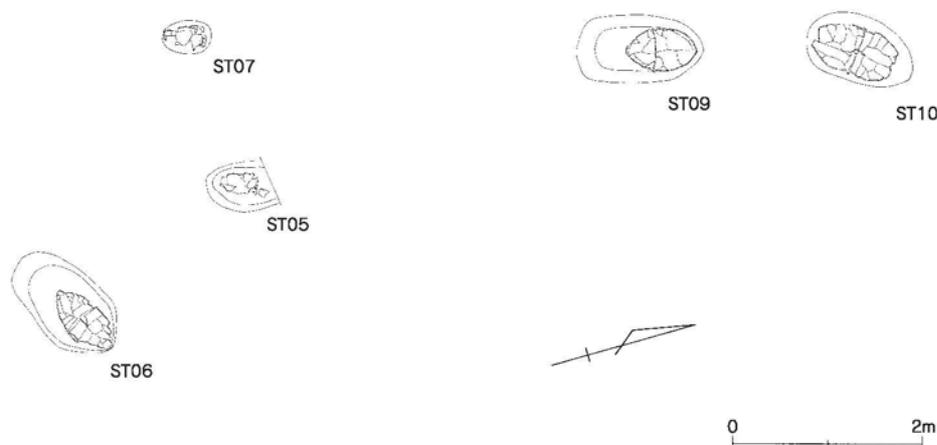


図7 ST配置 (1/80)

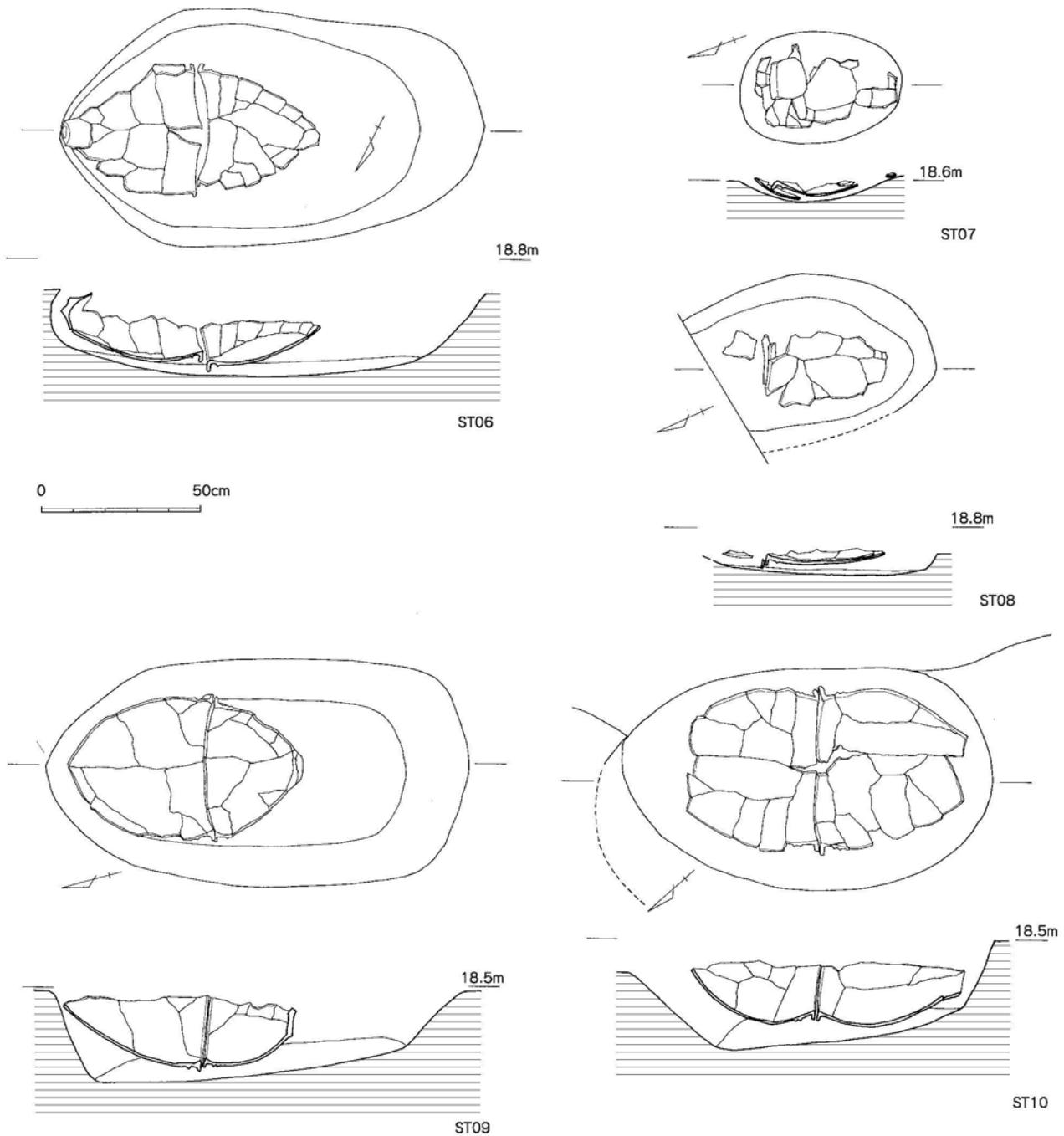


図8 ST (1/20)

甕棺 (図9-3)

上甕はほとんど残っておらず図示していない。下甕には甕を用いる。下甕はわずかに外側へ傾斜する断面逆L字形の口縁部を有し、口縁下部には断面三角形の突帯を一条巡らしている。外器面にはハケ目調整を施す。

ST09 (図8)

主軸を (S— 16° —W) にとる。削平により甕棺の1/2程が残るのみである。墓坑は現状では1.3×0.7mの楕円形を呈しており、深さは0.3m程。甕棺の埋置は水平に近いが、下甕がわずかに下を向く体裁をとっている。

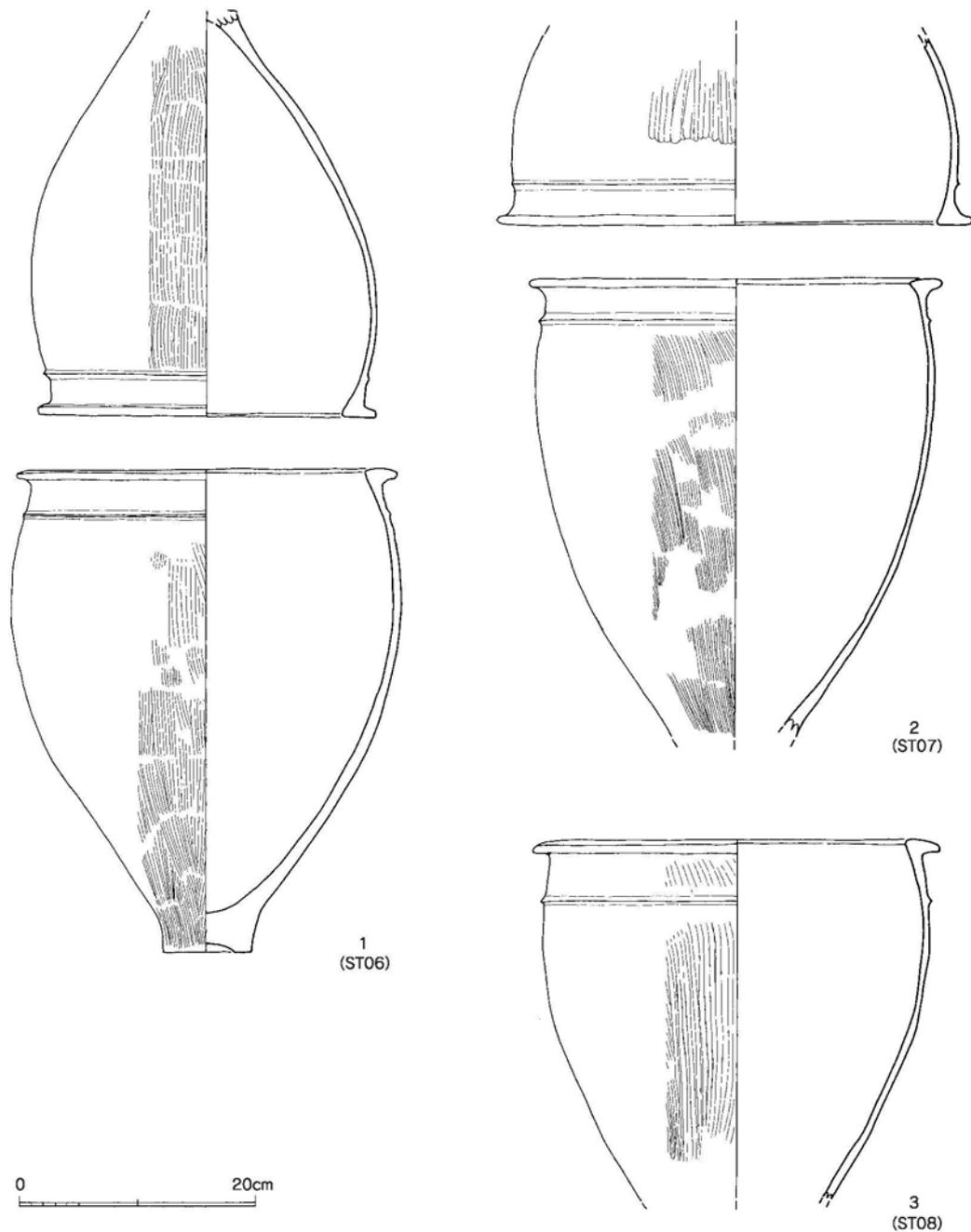


図9 ST06・07・08 (1/6)

甕棺 (図10-1)

上甕には鉢, 下甕には甕を用いる。上下いずれの甕も断面逆L字形の口縁部を有し、口縁下部には断面三角形の突帯を上甕は2条, 下甕は1条巡らしている。上甕の上面はわずかに凹む。下甕の外器面にはハケ目調整が残る。

ST10 (図8)

主軸を (N— 40° —E) にとる。削平により甕棺の1/2程が残るのみである。墓坑は現状では1.2×0.7mの楕円形を呈しており、深さは0.3m程。甕棺の埋置はほぼ水平である。

甕棺 (図10-2)

上甕, 下甕とも甕を用いる。上下いずれの甕も断面逆L字形の口縁部を有し、口縁下部には断面三角形の弱い突帯を2条巡らしている。上下甕とも口縁外側の端面には刻み目が認められる。外器面にはハケ目調整を施す。

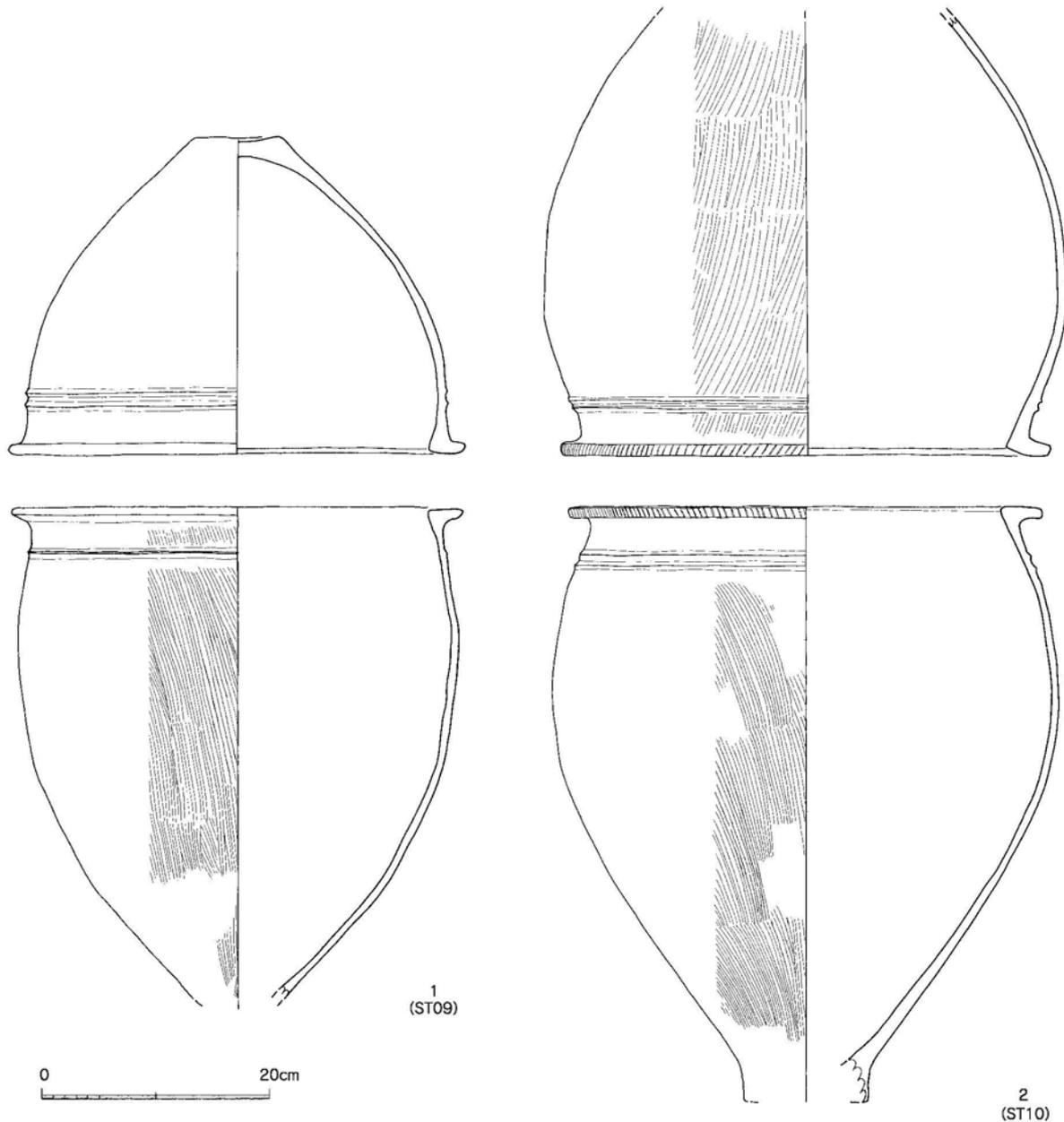


図10 ST09・10 (1/6)

3) 溝 (SD) (図11～16)

今回の調査では計4本の溝を検出した。SD02は調査区中央部にて検出されたものであるが、10cmにも満たない浅いもので、壁面の立ち上がりも不明瞭であり、今回の報告からは除外した。ごく少ない出土遺物からみれば中世以降に位置づけることができるだろう。以下では、その他3本の溝 (SD01・11・13) について報告をおこなうこととする。

SD01 (図11)

調査区の中央を南北方向 (N—20°—E) にのびる溝で、幅3.5m、深さ0.6mを測る。直線的にはしる溝と考えて良いだろう。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。砂層、そして黒褐色シルト質層の堆積から、この溝は水路であった可能性が高い。溝内の堆積は砂層 (3層) を挟んで大きく二つに分けることができる。出土遺物をみれば、上層は古墳時代中期前半の遺物、下層は古墳時代前期の遺物をそれぞれ上限としているといえるだろう。

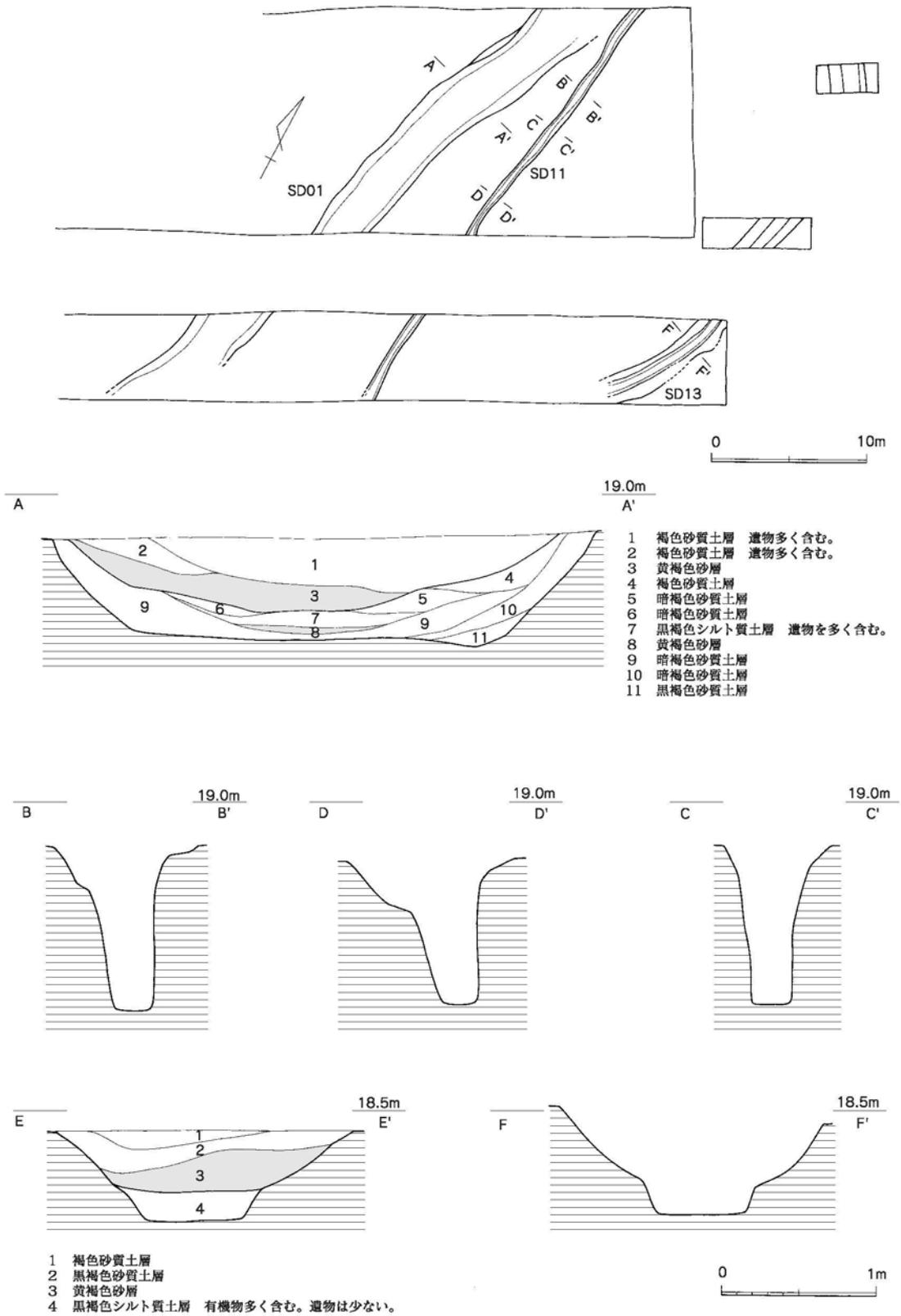


図11 SD (1/400, 1/40)

よって、ここではSDO1の掘削時期を古墳時代前期とし、古墳時代中期前半に廃絶したものと考
えておきたい。

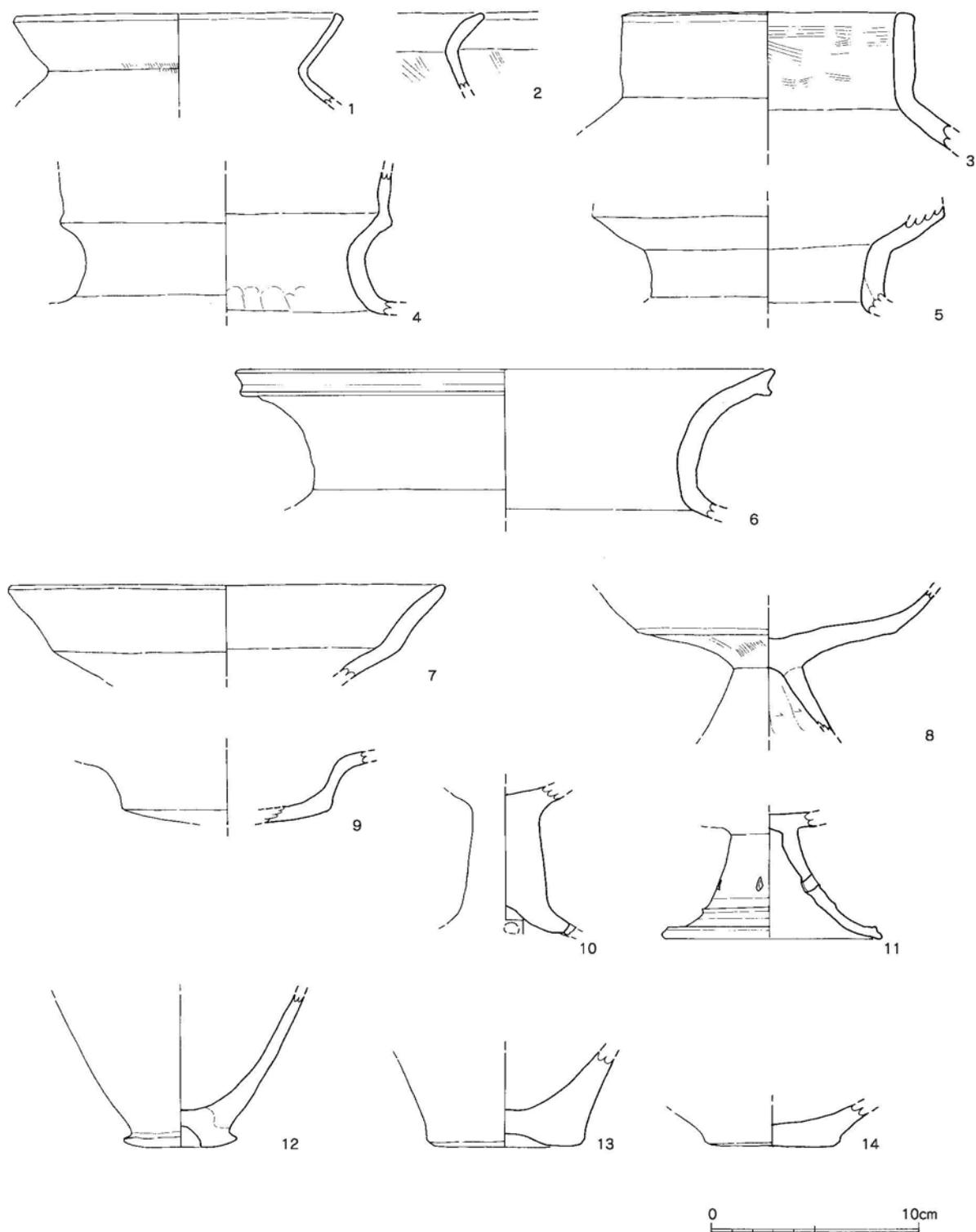


図12 SDO1上層出土遺物 (1/3)

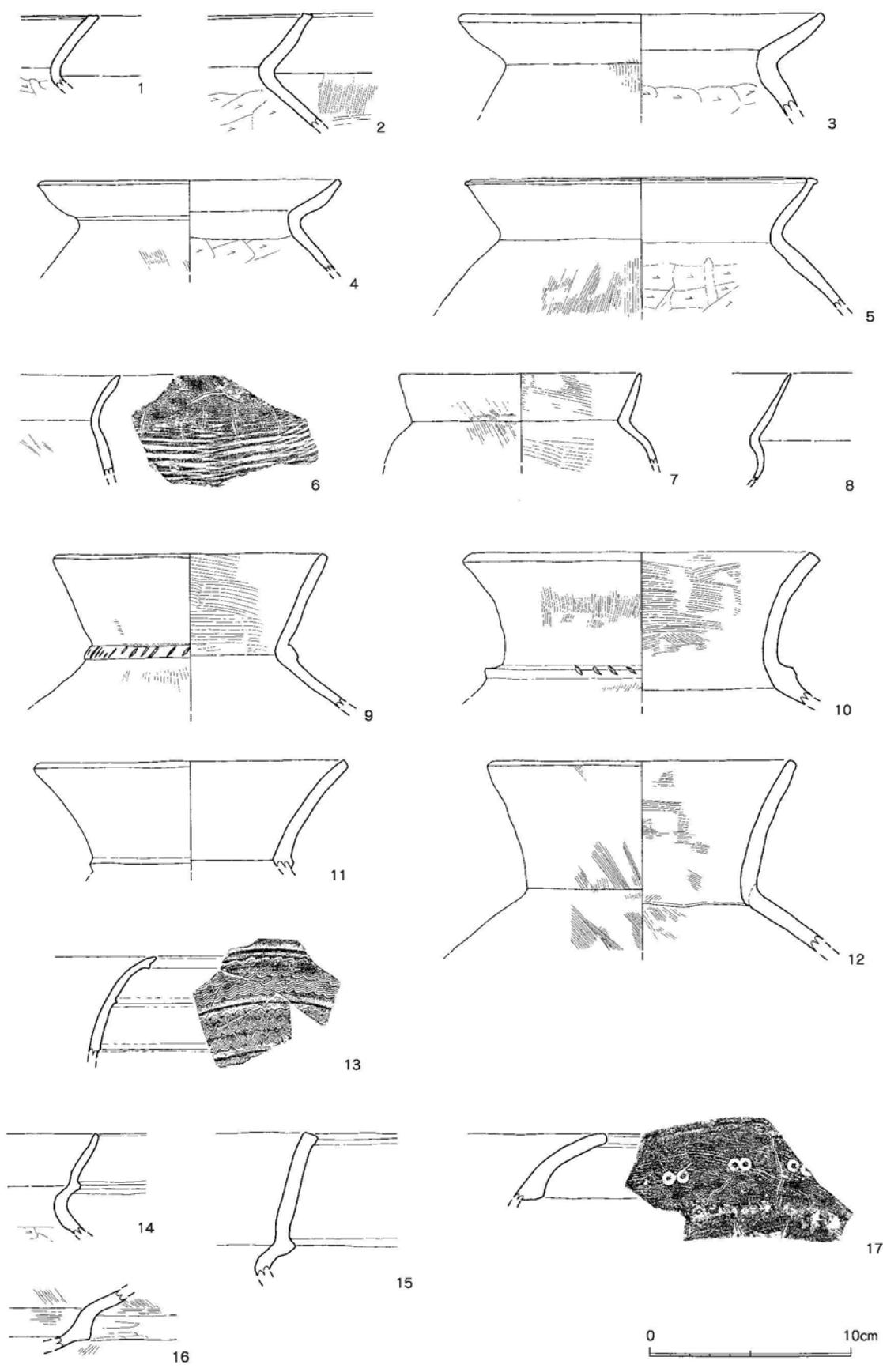


图13 SD01下層出土遺物1 (1/3)

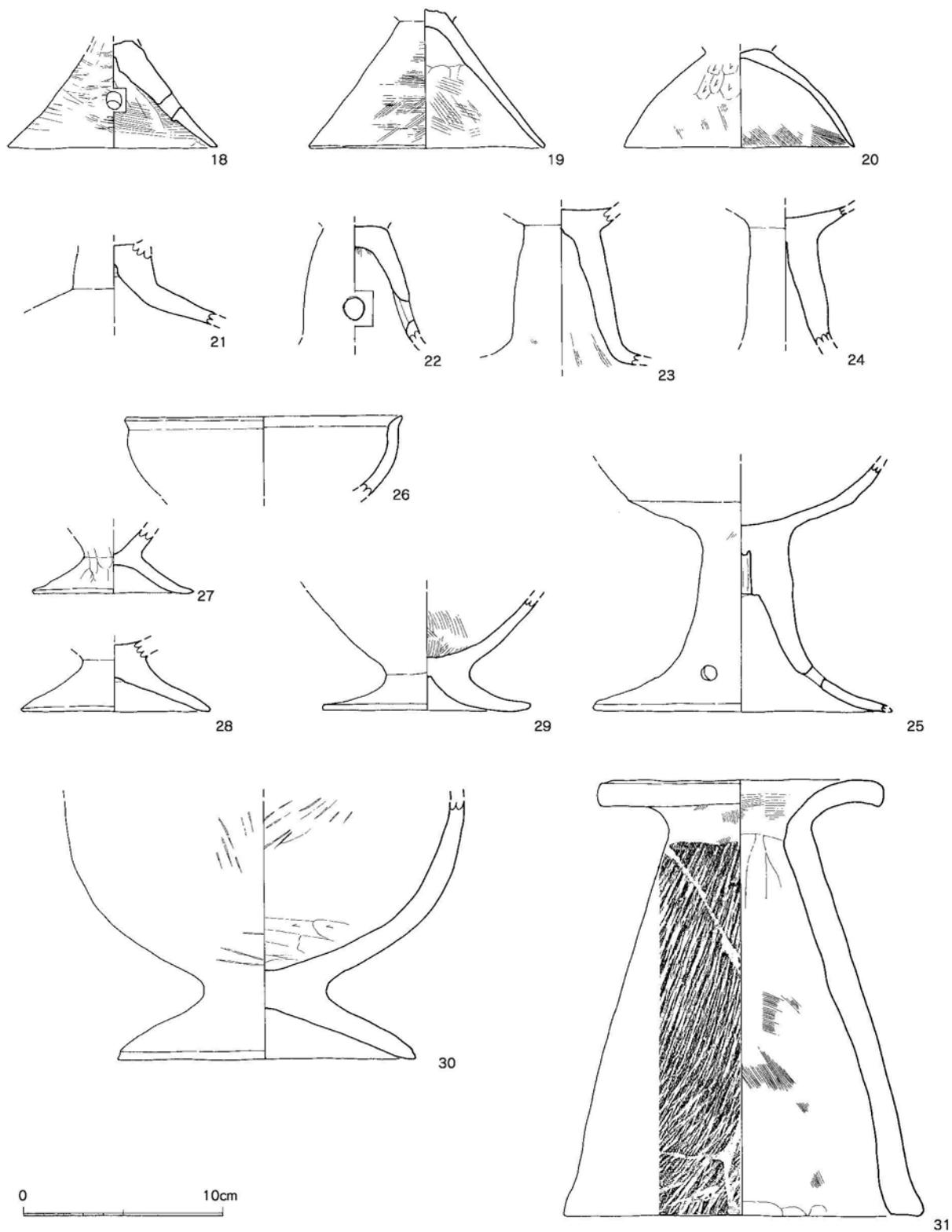


图14 SD01下層出土遺物2 (1/3)

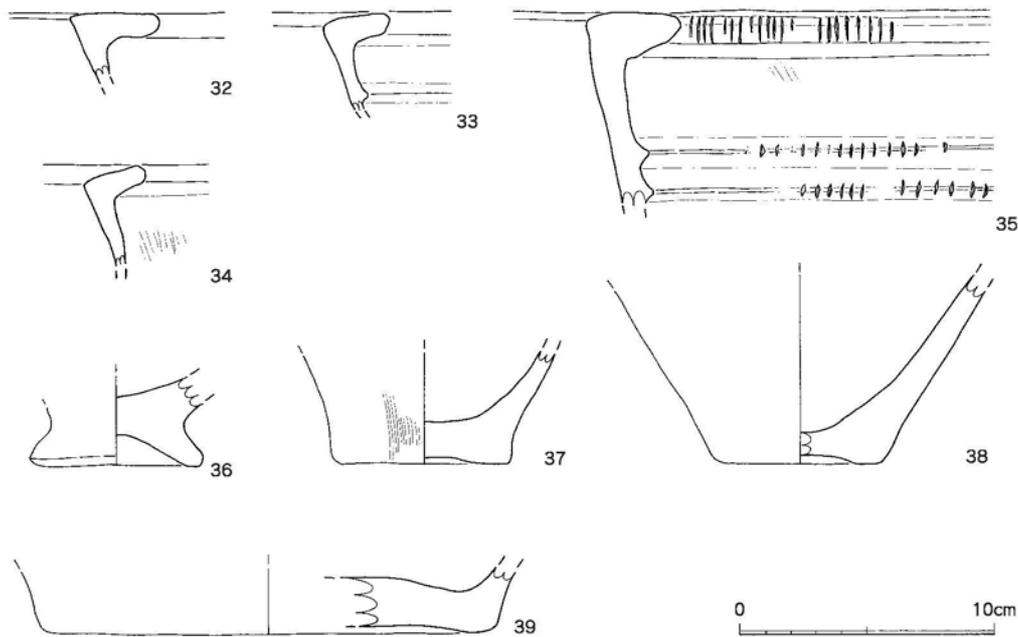


図15 SDO1下層出土遺物3 (1/3)

SDO1 出土遺物

上層出土の遺物 (図12)

1・2は土師器甕の口縁部片。3は土師器直口壺の口縁部片。4・5は土師器二重口縁壺の頸部片。6は須恵器甕口縁部片。口縁部下に突帯を1条巡らしている。7～10は土師器高杯。7・8は高杯口縁部片(7)と基部片(8)。共に杯部途中で屈曲する。8は「ハ」の字に開く脚部を有する。ともに古墳時代中期前半。9は有段高杯の杯部、10は高杯基部である。11は須恵器高杯脚部片。円形の透かしを3方向より施し、脚中央と端部付近にそれぞれ突帯を1条巡らしている。12～14は弥生土器底部片である。12は13はわずかな上げ底、14は平底をそれぞれ呈する。

このように上層からは、弥生時代前～中期、古墳時代前期、古墳時代中期前半の各遺物が出土している。

下層出土の遺物 (図13～15)

1～6は土師器甕口縁部片。9～12は壺である。7・8は丸底壺。9～11は頸部に突帯を巡らし、9・10はその突帯に刻み目を施す。13は須恵器壺口縁部片であり、口縁部外面に3条の突帯を巡らし、その間に3段の波状文を描く。14～17は二重口縁壺である。17は外面に列点文を巡らしている。18～21は小形器台である。脚部が「ハ」の字に開くもの(18・19)、内湾するもの(20)、脚部途中で屈曲するもの(21)がある。22～24は高杯脚部片。26は鉢口縁部片。27～30は台付鉢等の台部片。31は器台である。外面にはタタキの痕跡が残る。32～39は縄文・弥生土器である。32～35は弥生時代中期前半の甕口縁部片。いずれも断面逆L字形の口縁部を有し、口縁部下に1条(33)もしくは2条(35)の突帯を巡らす。35は口縁外面及び突帯に刻み目を施している。36～38は甕底部片。36は側面のくびれた強い上げ底、37・38はわずかな上げ底を呈する。39は縄文土器底部片。明赤褐色を呈し、胎土には滑石を多く含む。

下層からは縄文時代、弥生時代中期の土器の他、古墳時代前期の土器が出土している。13の資料は上層からの混入品であるとみなしておきたい。

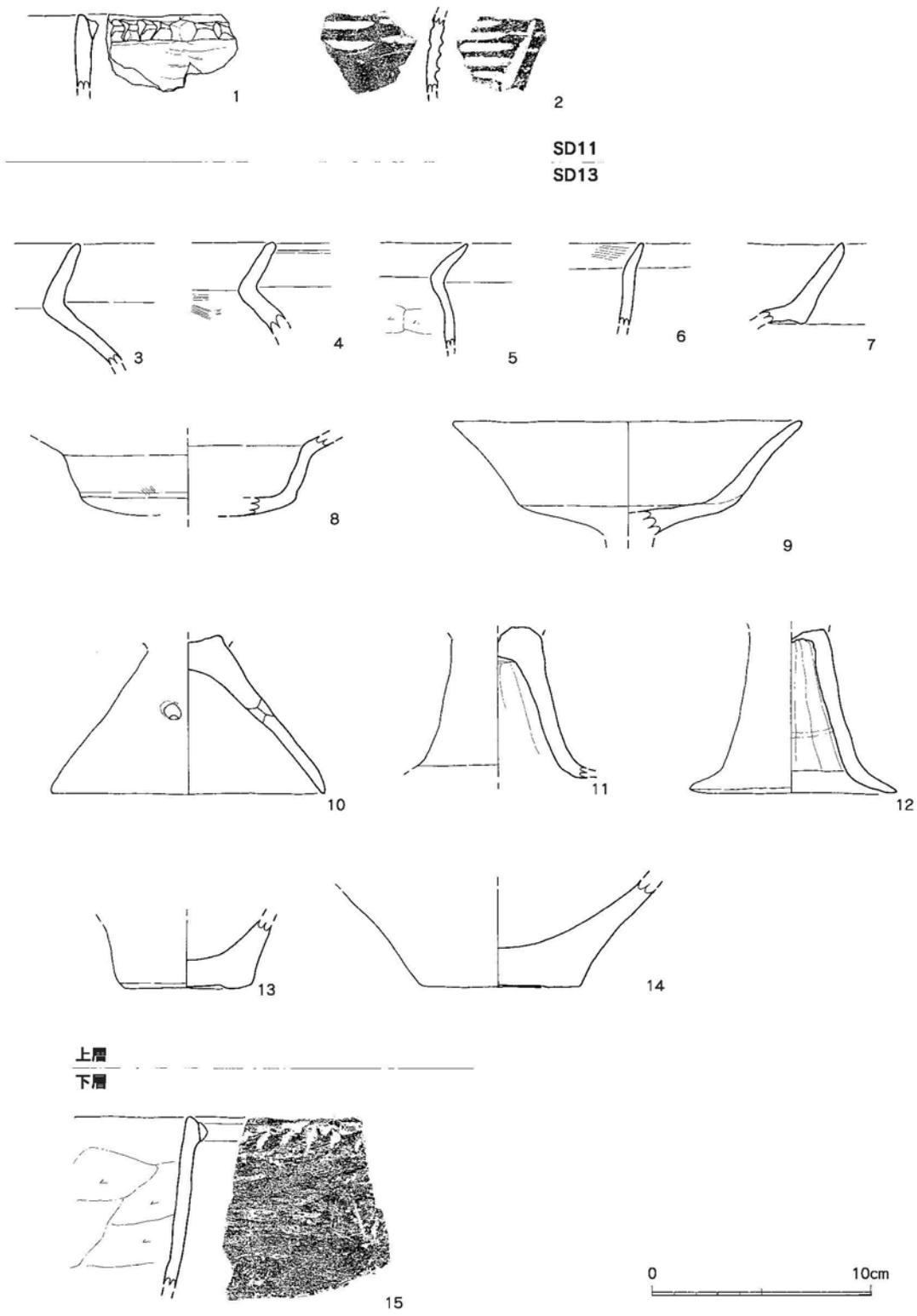


图16 SD11·13出土遺物 (1/3)

SD11 (図11・16)

SDO1の東側を南北方向(N-8°-E)に直線的にのびる溝である。幅0.7~0.8m、深さ1mを測る。壁面の立ち上がりは急で、垂直に近い。ただ、西側の壁面では上部が幅広となっている箇所も見受けられる(B-B', D-D'断面参照)。埋土は暗褐色シルト質土で、粘性はきわめて強い。底面近くでは湧水が認められる。出土遺物はごくわずかであるが、遺物から判断すれば、この溝は縄文時代晩期に位置づけることができる。

出土遺物 (図16-1・2)

深鉢口縁部片。口縁部には刻目突帯文を有する。3は曾畑式土器。暗赤褐色を呈し、胎土に滑石を含む。

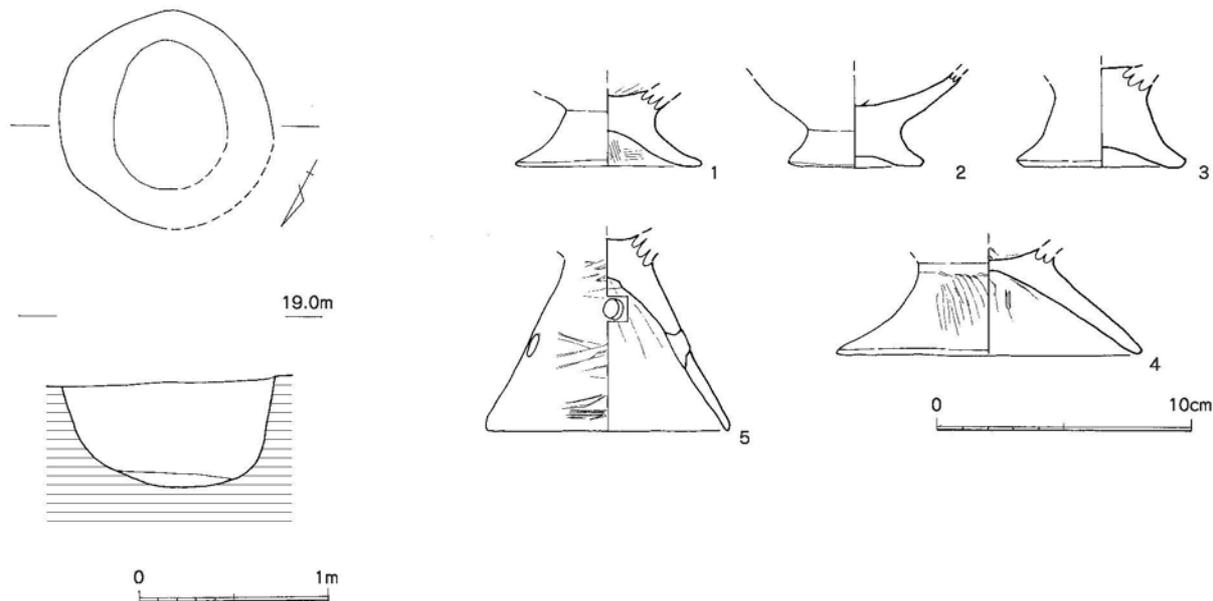


図17 SK12 (1/40, 1/3)

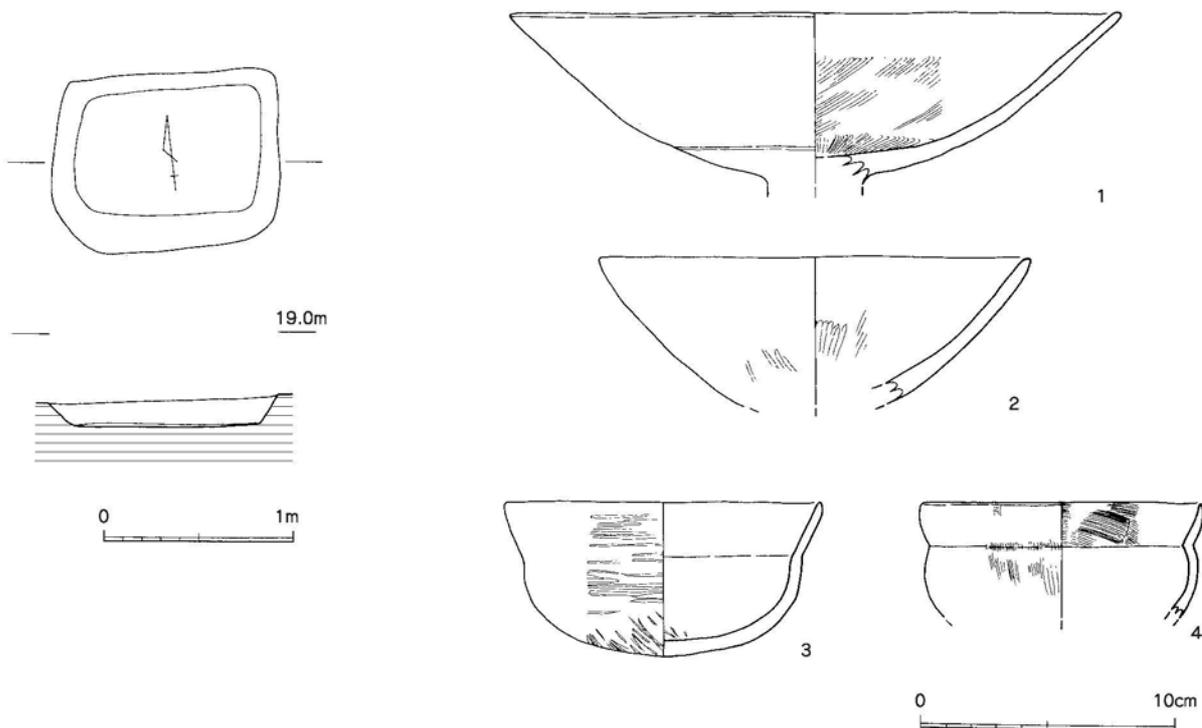


図18 SK14 (1/40, 1/3)

SD13 (図11・16)

調査区東端で検出したもので、トレンチ調査を実施した結果、溝は円弧を描くことが判明した。これは直線的なSDO 1・13と対照的である。幅1.7~2.0m、深さ0.6mを測る。壁面は途中で段をなし、緩やかな傾斜であったものが、底面より高さ0.2m程で、垂直に近い落ち込みをみせる。SD13においても砂層(E-E'断面3層)を挟んで、上下に大きな違いがある。1・2層は褐色もしくは黒褐色の砂質土で、古墳時代中期前半までの遺物を含むのに対し、落ち込み部分(4層)は黒褐色のシルト質土で、極めて粘性が強く、SD11埋土と類似する。また、4層における遺物の出土量はごくわずかであるが、縄文時代晩期までの遺物しかみることができない。従って、この溝の掘削時期をSD11と同じく縄文時代晩期に求め、その後の使用を経て、廃絶時をSDO1と同じく古墳時代中期前半と考えることにしたい。尚、堆積の状況から、SD13の性格はSDO1・11と同じく水路であると考えている。

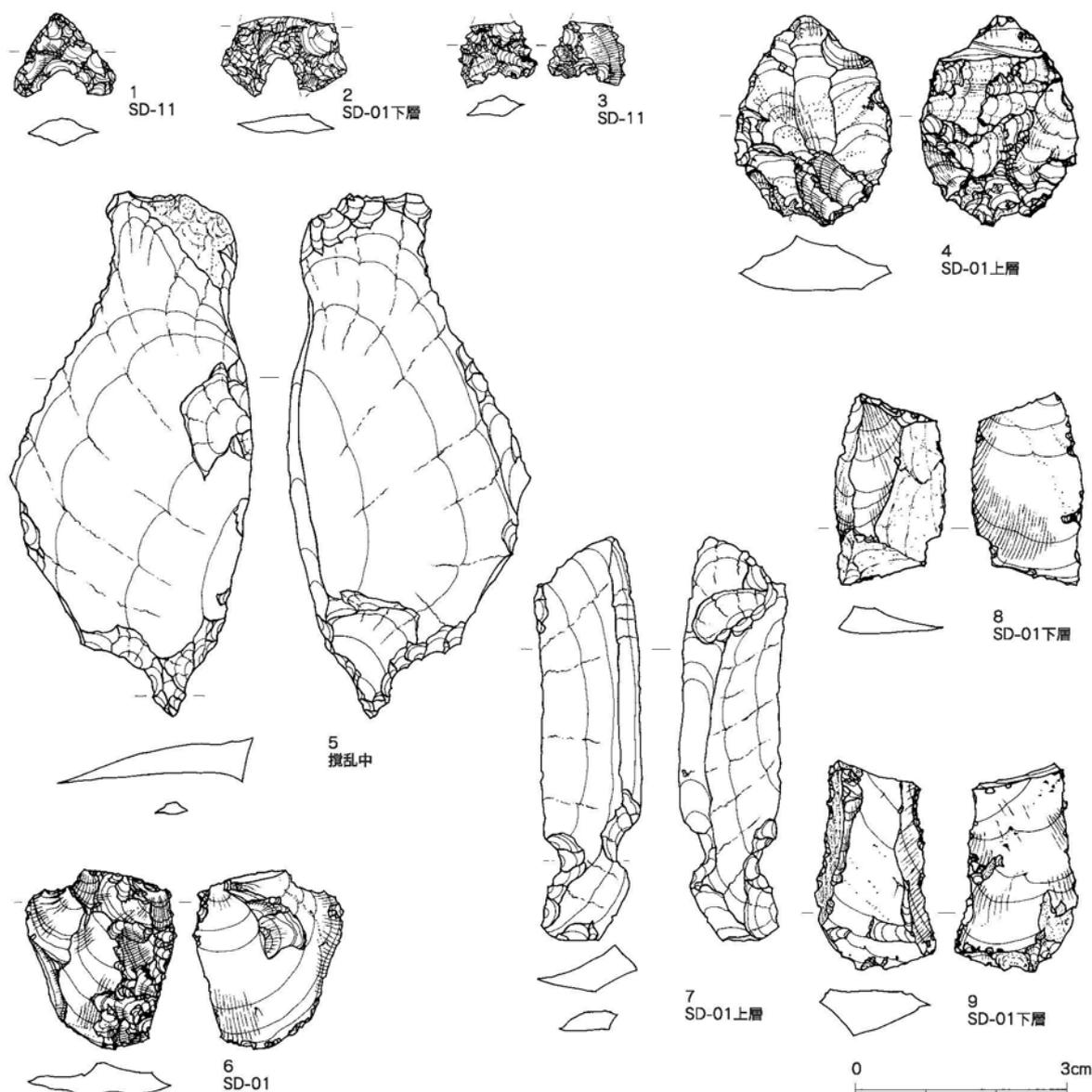


図19 出土石器 (1/1)

出土遺物 (図16-3~15)

上層出土の遺物 (図16-3~14) 3~6は甕口縁部片。7は二重口縁壺の口縁部片。10は小形器台の脚部片。8・9は高杯部片で、11・12は高杯脚部片。9は杯部途中が屈曲するもので、古墳時代中期前半に位置づけることができる。13・14は弥生土器底部片。いずれも平底。

下層出土の遺物 (図16-15) 1は深鉢口縁部片である。口縁部下には刻目突帯文を施す。

4) 土坑 (SK) (図17・18)

SK12 (図17) 調査区中央に位置し、SDO1と切り合いを有する。調査当初はSDO1を切り込んでいるものと考えていたが、出土遺物を検討すれば、これは誤認である可能性が高い。SK12は径1.1mを測る円形の土坑で、深さは0.6mを測る。壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面は丸みを帯びている。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物をみれば、この土坑は古墳時代前期に位置づけることができ、調査所見とは逆に、SDO1に先行するものと考えておきたい。

出土遺物 1~4は台付鉢等の台部。5は小形器台の脚部である。脚部は「ハ」字形に開き、3方向より円形の透かし孔を穿っている。

SK14 (図18) 調査区北側に存在する。平面は1.2×0.9mの略方形を呈し、深さは10~20cm程を測る。ごく浅い土坑である。出土遺物から、古墳時代前期に位置づけることができる。

出土遺物 1は高杯杯部片。2は鉢であろうか。口縁部片。3・4は丸底壺である。

5) 特記遺物

今回の調査では石器がいくつか出土している。その内容について、以下に報告する (図19)。尚、出土地点については図中に記している。1~3は打製石鏃。いずれも黒曜石製。4は打製石鏃の未完成品であろうか。黒曜石製。5は石錐で、古銅輝石安山岩製。6はサイドスクレイパー、黒曜石製。7はつまみ形石器で、古銅輝石安山岩製。8・9は使用痕ある剥片で、いずれも黒曜石製。

IV まとめ

以下では今回の調査成果について述べる。

住居について 住居は計3軒検出した。遺存状況は悪く、他の住居が存在した可能性も高い。住居は古墳時代前期、そして古墳時代中期前半のもので、それぞれは調査区内に存在する溝の時期とも一致する。また、最も新しいSCO3は古墳時代中期前半に位置づけることのできるものだが、カマドを有していた可能性が高いことは注意すべきだろう。

甕棺墓について 甕棺墓は5基確認できた。いずれも小児棺と目される小形のもので、成人棺は認められない。弥生時代中期前半のもので、概期の墓域確認が今後の課題となるだろう。

溝について 今回検出した3条の溝 (SDO1・11・13) はいずれも水路と考えられるもので、古墳時代中期前半、古墳時代前期、縄文時代晩期という、大きく3時期の使用が認められる。特に突帯文期の溝を検出できたことは大きな成果といえるだろう。近在において同様の遺構は笠拔遺跡で確認されている。時期は異なるが、第2次調査で確認された水田遺構も含め、当遺跡における集落景観の復元も、今後の調査の進展によって可能となるだろう。

文献

常松幹雄編2003『笠拔遺跡』—第1・2次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第752集



1 調査区北東側 (北東から)

3 調査区北西側 (北東から)

2 調査区南東側 (北東から)

4 調査区南西側 (北東から)



1	SD01 (南から)	2	SD01 (南から)
3	SD11 (南から)	4	SD13 (南から)
5	SC03・04・05 (南東から)	6	SK12 (南から)



1 ST全景 (北から)
3 ST07 (北東から)
5 ST09 (南西から)

2 ST06 (南西から)
4 ST08 (南西から)
6 ST10 (南西から)



图14-31



图16-10



图16-12



图13-5



图18-3



图5-3

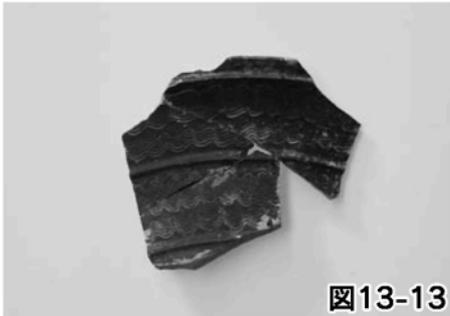


图13-13



图12-11



图16-1-2-15

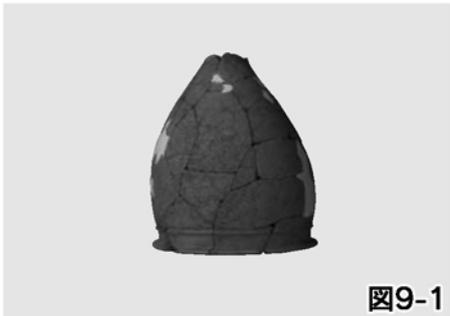


图9-1



图10-1

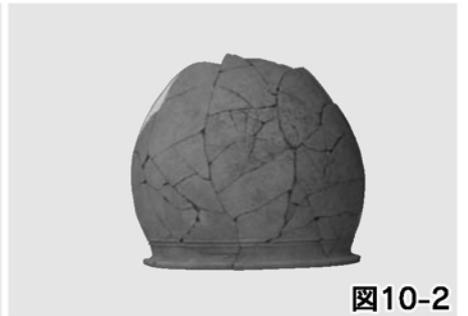


图10-2



图9-1

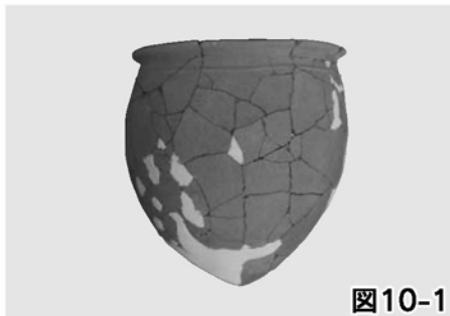


图10-1

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	けやごう
書名	警弥郷B遺跡3
副書名	第5次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第929集
編著者名	蔵富士 寛
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667
発行年月日	2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東緯 。'。"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
けやごう 警弥郷B遺跡	ふくおかけんふくおかしみなみくやなが 福岡県福岡市南区弥永5丁目 18-2～5	4013	0158	33° 31' 31"	130° 26' 8"	20050601～ 20050826	1237	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
警弥郷B遺跡	集落・墓地	縄文 弥生 古墳	竪穴住居 3 溝 4 甕棺墓 5 土坑 6	縄文土器 須恵器 弥生土器 石器 土師器	

要 旨	<p>今回の調査では、主な遺構として住居3軒、甕棺5基、溝3条を検出した。竪穴住居は古墳時代前期～中期前半のもので、中期前半の住居はカマドを有している。甕棺墓はいずれも小児棺と考えられ、弥生時代中期前半に位置づけることができる。溝はいずれも水路で、縄文時代晩期、古墳時代前期、古墳時代中期前半の各時期に溝が機能していたことがわかった。特に突帯文期の溝を検出できたことは大きな成果といえるだろう。</p>
-----	---

警弥郷B遺跡 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第929集

2007年3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 江口印刷株式会社
福岡市南区大楠2-22-8



遺跡名	遺跡略号	調査番号
警弥郷B5次	KYB-5	0521